

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19530444

研究課題名（和文） 自然葬の社会的・文化的意味空間の研究 生の終末と遺骨処理の文化装置をめぐって

研究課題名（英文） The Research in the Socio-cultural Meanings of The Natural Funeral (shizensou)- focused on death and the cultural disposal of the skeletal remains

研究代表者

田口 宏昭（TAGUCHI HIROAKI）

熊本大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：20040503

研究成果の概要（和文）：

相互に関連する以下の三つの研究成果が得られた。

- （1）日本の近世において、畿内に広く分布していた両墓制についての先行研究及び実地踏査から、埋墓と詣墓という二種類の墓を持つこの制度が、遺骨と靈魂が日本の伝統のなかで必ずしも一体の「存在」として扱われてこなかった事実に注目し、現代の自然葬に顕著な遺骨崇拜に対する否定的態度という要素がこの伝統のなかに含まれていたことを明らかにした。
- （2）そして他方、同様に近世において、火葬、焼骨の投棄（散骨）、無墓地、無墓参供養の4特性を有する無墓制と呼ばれる葬送形式があったことに注目し、現代の自然葬がこの墓制と形式的な類似性を持ち、無墓制が現代の自然葬の原型であることを明らかにした。
- （3）散骨の実施現場での参与観察を通して、散骨が無宗教の「宗教的」儀礼として行われていること、すなわち、散骨を支持する人びとが特定の宗教を信じる場合も信じない場合でも、一時的に散骨の場として特定された空間並びに時間が聖化され、散骨の儀礼そのものが自ずと「聖なるもの」として現象してくることを見出した。  
このような散骨儀礼は、死者の人格自体の聖化を意味するものであり、「墓は心のなかに」という散骨推進団体が掲げるスローガンと響きあうものである。
- （4）本研究は当初、散骨の行為について「自然葬をすすめる会」の会員たちが語る際に「自然に帰る」という言説を多用しながら他界表象を描いているという事実に基づき、自然葬が自然界の諸物に宿る精霊への信仰として理解されるアニミズムへ回帰する現象である、という仮説を立てて出発した。この仮説を確かめるために「自然葬をすすめる会」の会員 315 名を対象にして実施したアンケート調査の結果から明らかとなったのは、散骨という行為を通して、死者の靈魂がそれら諸物に入りこみ精霊として存在し続けるという観念は限定的で、むしろ人びとは死後の靈魂を信じないか、あるいは靈魂の存続に対して確信を持たない傾向を示すことが明らかとなり、仮説は否定された。

研究成果の概要（英文）：

The results that was given through this study are the followings.

- (1) I researched the preceding studies of the Ryoubosei distributed in the Kinki region in an early-modern times, and practiced fieldwork in some communities. The Ryoubosei is the mortuary practices which are characterized by the two kinds of grave, called

the Umebaka and the Mairibaka. Then I observed that the skeletal remains and the soul had not always been considered the indivisible existence. This fact means that the negative (and radical) attitude against the remains worship, found out among people upholding ashes scattering today, had been included in the tradition of the Ryoubosei.

- (2) I gave attention also to the Mubosei, the mortuary practices without any gravestone, which existed in the early-modern times. That has four characteristics, that is to say, cremation, ashes scattering, no graves and no visit to a grave. These characteristics are the same ones as modern natural funeral (shizensou), and therefore the Mubosei is likely to be an archetype of shizensou.
- (3) Ashes scattering as a ritual without any specific religion has been found out regularly, through my observations. That is, whether people upholding ashes scattering are the believers of the specific religion or not, the selected space and time for scattering are sanctified, which is to say, the ritual of ashes scattering appears itself as the sacred for a while. This kind of ritual, even if it is done by nonreligious people, means sanctification of the personality of the dead, which is in accord with the slogan of "Settle the gravestone into our heart!"
- (4) This research, at first, has been begun on the hypothesis that the movement of shizensou means a phenomenon returning to animism, which is the belief in the spirit of various natural objects. The reason is that I knew some stereotyped and repeated statements such as, He has returned to nature or She could have returned to nature. For checking out this hypothesis, I practiced a questionnaire to 315 respondents belonging to the association that supports ashes scattering. Then, a small number of respondents agreed with the concept that the soul of the dead person go into a natural object after ashes scattering, and exist eternally as the spirit of it. On the contrary, many respondents have tendency that not to believe or sure of the existence of the soul after death. Therefore, the original hypothesis has to be denied on these evidences.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：自然葬、散骨、墓制、両墓制、霊魂、アニミズム、他界表象、聖なるもの

#### 1. 研究開始当初の背景

自然葬は、死者を火葬に付したのち、その遺骨を墓に入れるのではなくて、骨を小さく砕いてそれを山野や海に撒く行為のことで

ある。この行為は日本では永い間非合法であると信じられてきたが、現在では合法的であることが行政当局により確認されている。しかし、いまなお日本の社会全体の中でみると、

少なくとも表面上は散骨を支持する人びとは少ない。言い換えれば、現代日本においては遺骨を墓に入れるという行為の形式が支配的・優位的な (dominant) 文化であり、散骨は現時点ではサブカルチャー (sub-culture 下位文化) または対抗文化 (contra-culture) である。

この対抗文化の支持者たちは、「我々には墓はいらない、墓は自然を破壊するだけである、死後我々は散骨を通して自然に帰る」と主張する。墓を基盤として成り立つ日本の祖先祭祀を真っ向から否定するこの主張は、日本社会の構造的基盤の変化 工業化、農業と結びついていた定住社会の弱体化、地域共同体の解体、人口の流動化、少子化、高齢化、未婚化、家族紐帯の弱体化、親族組織の弱体化、等々に伴う支配的・優位的文化の動揺を反映している。そこに、日本人の他界表象の劇的な変化、ないし基底的な多様化の予兆を見出すことができる。「自然葬をすすめる会」の会員たちの行動と意識は、ある意味において日本社会の変化と多様化の最前線に立つ。そこで、これらの人々の言説と意識を探るための調査研究を始めることになった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、自然葬と呼ばれる遺骨の処理の方法とそれが提示する社会的・文化的意味を明らかにすることである。

## 3. 研究の方法

文献研究、実地踏査及びアンケート調査の三つの方法に依った。実地調査は期間内に沖縄県、九州、近畿地方で実施し、期間外の2010年には台湾でも追調査を実施した。アンケート調査は散骨支援団体である「NPO 法人 葬送の自由をすすめる会」に依頼して、8,120名の会員名簿のなかから等間隔抽出の方法で500名の標本を選んでもらい、対象者には無記入での回答を求めて調査票を郵送で送り、また無記入で返送を依頼した。

## 4. 研究成果

三つの方法を用いた研究から得られた知見を以下に記す。

(1) 日本における他界観の変容について検討した。その結果、現在の状況を一言で言うと、他界観の多様化として要約できる。言い換えれば、従来、社会通念の強制力のなかに

押し込められてきた多様な他界観 (他界を認めない観念もふくめて) がそれぞれ自己主張を始めたことである。自然葬の支持者の増加はまさに、その有無も含めて自らの他界観に従って自分の死の最後を締めくくる準備を始めようとする人びとが増加していることを示した。

他界観の変容が示唆する意味を考察する際、鍵となったのは、両墓制と呼ばれる墓制である。

この墓制は特に畿内に多く分布していたと言われている。社会学の分野ではこの墓制は話題として取り上げられることがほとんどないが、民俗学の分野では、この両墓制の研究は比較的よく行われてきた。近年、民俗学者の新谷尚紀氏は日本の墓制として両墓制、単墓制、無墓制、無石塔墓制、一般の火葬墓制に区分しておられるが、これらのうち両墓制とは 埋墓 と 詣墓 を区別する葬制のことである。埋墓 とは、文字通りいわゆる葬式と呼ばれる一次葬を終えた後、遺体を直接埋めてある墓のことである。一定期間を経た後、この 埋墓 から死者の靈魂を別の場所に建造した石塔に遷し (遷さない事例もあるが)、その石塔のあるところが 詣墓 とされる。私の実地踏査においても例えば長崎県壱岐島の江戸時代の墓地、奈良県の東南部の山中にある室生寺の境内の墓地でもそれを観察した。

過去の両墓制研究を批判的に整理し、かつ自らも豊富な実証データを収集分析された新谷氏の両墓制の緻密な研究によれば、土葬を前提にした両墓制にも、墓参供養という行為から見た場合、石塔のある 詣墓 と遺体を埋めた 埋墓 の両方に墓参供養する型と、いずれか片方に墓参供養する型の二つがある。後者はさらに 詣墓 だけに墓参供養する型と、埋墓 だけに墓参供養する型に分かれる。

この両墓制を分析して導き出せる重要なことは、詣墓 だけに墓参供養する型では、死者の靈魂は遺体にはもはやなくて石塔にのみあるということになるし、埋墓 だけに墓参供養する型では、死者の靈魂は 詣墓 にはなく、埋墓 のみにあることになる。この場合は 詣墓 は死者の名の記録機能または目印機能しか負わないということの意味する。

他方、この場合 埋墓 の骨に死者の靈魂

は宿っていると人びとは見ていたのであろうか。まだ未解明な点が多いが、形に表れた両墓制自体の多様な在り方が、遺体（遺骨）と靈魂の関係に対する日本人の多元的な靈魂観の在り方を示して、日本の墓制の伝統を一元的にとらえる偏狭な主張に対する警鐘となる。

このような両墓制は、明治、大正、昭和と時代がすすむにつれて火葬の普及とともに衰退してきた。そして今日一般的となっているのは火葬後、遺骨を石塔（墓石）の下などに納める型のいわば「火葬単墓制」である。

では、自然葬はどこに分類されるのか。それはまず形式上墓を有しないという意味において無墓制に分類される。かつては土葬と結びついた状態で、埋葬した地点も放棄し、かつ墓地も設けず墓参供養もしないという「無墓制」の事例があり、これは土葬無墓制と呼べるであろう。他方、浄土真宗門徒のあいだで見られた事例のように、火葬と結びついた状態で火葬後の焼骨を投棄（散骨）し、墓地も設けず、また墓参供養もしないという「無墓制」の事例があった。こちらの方は火葬無墓制と呼べるであろう。とすれば、自然葬というのは概念上、火葬無墓制に分類される。そして明治以降に創生された「新しい伝統」とも言える火葬単墓制 単墓制の上に火葬が重なった墓制 と、対抗文化としての自然葬 火葬無墓制 とが対峙しているのが今日の状況であると言える。

（2）私は 2007 年以降、必ずしも仏教と結びつかない宗教としての祖先祭祀の原型が沖縄に残っていると考え、沖縄の調査を重ねた。そこで行われている、文字通り土着的な祖先祭祀と伝統的な亀甲墓の大きさに圧倒されるのであるが、そこにおいてさえも、少子化と人の流動化に伴って祖先祭祀の将来はそれほど楽観的なものではない。ここでも人々の生活圏が小さな共同体の範囲内で完結することがなくなり、また人々の生活構造が多様化するに伴い、祖先祭祀だけでなく、この地の多神教的神々を祀る共同体の祭礼の維持が次第に困難さを増している。

沖縄を含む琉球文化圏に見る伝統的な祖先祭祀は遺骨への信仰と深く結びついてきた。風葬または土葬の後、遺族の手による洗骨をへて死者の五体の骨は厨子瓶等に納められ墓地におかれる。そして死後 33 年の儀

礼を境に死者の靈魂は「天」あるいは海のかなたの「ニラカナイ」へ送り出される。ここでは死者靈は抽象的な神へと昇華され、その靈魂は永遠性を獲得するとみなされている。そこでも近年火葬が導入され（島によって導入の遅速がある）、本土並みに遺骨は墓の骨室に納められるようになってきた。高熱を加えられて粉々になった遺骨は、五体揃った遺骨とは異なり、もはや死者の具体性をほとんど失わざるをえないのであるが、火葬という遺体処理の方法は死の象徴的意味の変化をもたらす。

人間の死が緩やかに進行するのとは違って、きわめて短時間の葬儀によって片付けられ、火葬によって一瞬のうちに終わるようになっていく。それだけ死者への追憶が、ごく限られた遺族のあいだで、断念のし難さ、罪責感を伴いながら死の余韻を重く永く引き延ばすことになる。

今日では重油やガスを燃料とする効率的な火葬という遺体処理の文化はもはや後戻りさせられない大きな流れであり、多くの日本人は明確な他界観をもたないまま、半信半疑の靈魂の残存という主題を受け入れたり死を否定したりしながら、死に直面しなければならぬようになってきている。

本研究で扱った自然葬は、近世にみられた火葬無墓制と形式上の共通点はあるが、他方において質的には異なった「新しい火葬無墓制」であり、かつてとは異なり地域共同体の成員によってその儀礼が遂行されず、遺骨処理と墓参供養ならびに死者の追悼の個人主義化、祖先祭祀の衰退によって特徴づけられるものである。

（3）火葬単墓制において遺骨・遺灰を石塔内の納骨室に入れることと、火葬無墓制としての自然葬において遺骨を山野や海に撒くこととはまるで違ったことのように見えるかもしれないが、実はほとんど大差のないことである。後者における一層の「他界の衰退」という事態の進行を認めるとしても、両者において異なるのは、前者と比べて後者における他界表象の範囲は植物や動物が棲息する広大な自然界に広がっているという点である。第二次葬としての自然葬を選択する人々は、選択の自由を主張する際の「自由」と自然葬の空間の「広大さ」を重ね合わせ、そのなかで「自由」を得ることができるというイ

メージを自然葬に対して抱いているようである。

ただし後者においては、広がりを持つ他界であっても、宗教的な意味での他界それ自体に対する否認ないし不確信が横たわっている。このような背景のなかで、「他界」を外部に求めるのではなく、むしろ内部に、すなわち自らの「心のなか」に求めようという呼びかけが、散骨支援団体から行われている。これは死者に対する追悼を外部的な象徴に依らずに、個々人の記憶のなかで行うという、いわば死者追悼の徹底した個人主義化の兆しとも言える。

(4)当初、自然葬をアニミズムへの回帰の傾向であるという仮説命題を立てて研究を進めていたが、その仮説が支持されることが明らかとなった。私は2009年、散骨支援団体である「NPO 法人 自然葬をすすめる会」の会員8,120名から500名の標本を抽出し実施したアンケート調査を実施した。

表1 散骨後の靈魂の行方

魂の行方	人数	割合 (%)
死後に魂は残らない	102	32.4
わからない	101	32.1
天	48	15.1
海の彼方、海のなか	39	12.4
山、森、木、花等	9	2.9
その他	15	4.8
無回答	1	0.3
合計	315	100

315名から回収し(回収率63パーセント)、データの分析を行った。「散骨後の魂の行方」を尋ねた質問に対する回答結果を表1に示す。この質問への回答において、木や花、森や山などの自然界の諸対象を靈魂の「行き場」として具体的にイメージしておられる方がごく少数だがおられる反面、「死後に魂は残らない」と見なしている人が32パーセント強、また行方について確信を持っていない回答者として「わからない」と答えた回答者がほぼ同じ32パーセント強を占めるということが分かってきたからである。「その他」には「宇宙」や「心のなか」という回答も含まれる。

もしアニミズムへの回帰仮説が支持され

るとすれば、死者の靈魂は木や花、森や山、海中の岩や生き物などの自然界の諸対象に入り込み、そこで精霊と一体化して永遠に生き続けると表象されてもよさそうであるが、実際はそうではなかった。

とすれば、このような少なからぬ人々が自然界の諸物に靈魂や精霊が宿り、それが人間の世界に対して意味ある働きかけをして、幸福や災厄という効果をもたらすと信じるアニミズム的觀念に回帰している可能性はきわめて小さいと考えられる。

(5)今日少なくとも表面上は優位性を未だ保っているかに見える火葬単墓制と、新たな対抗文化としての自然葬(火葬無墓制)との拮抗関係が表面化している。この現象を日本における他界觀の持続と変容の問題として、また基層社会の危機の問題としてとらえるという視点からの研究はまだ緒についたばかりである。家族の小規模化、家族の形態の変化、地縁・血縁社会の弱体化、日本社会の人口の著しい流動化というような、日本の基層社会で起こっている人間の関係性の根本的な変化に晒されながら、日本における祖先祭祀文化の静かな「危機」が、自然葬という形であらわれてきている。

しかし、自然葬運動がそのような危機を招来したというよりも、むしろ日本社会の基層構造の深部での「危機的」変化が自然葬運動の醗酵を準備した、すなわち自然葬運動はそのような変化のパロメーターであると言える。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://hdl.handle.net/2298/18094>

田口 宏昭「日本における他界観の持続と  
変容 自然葬を通して見える基層社会の危  
機」(2010-03-06)、1-33 頁

<http://hdl.handle.net/2298/17451>

田口 宏昭「自然葬についての質問紙調  
査」について」(2010-12)、1-163 頁(デー  
タベース)(2011-02)、1-163 頁

<http://hdl.handle.net/2298/18094>

田口 宏昭「自然葬アンケート調査報告」  
(2011-02)、1-28 頁

田口 宏昭「自然葬についての質問紙調査」  
の概要報告」、『再生』第 75 号、2009.12、20  
-24 頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

田口、宏昭 (TAGUCHI, HIROAKI)  
熊本大学・大学院社会文化科学研究科・  
教授  
研究者番号：20040503

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

寺岡 伸悟 (TERAOKA SHINGO)  
奈良女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：90261239